

# 『我身にたどる姫君』巻六の位置付け

金光 桂子

鎌倉時代中期の成立とされる物語『我身にたどる姫君』全八巻の内、内容や用語に際立った特異性を持つ巻六は、夙に注目を集め、その成立についても論じられてきた。まず、別作者の疑いが呈された<sup>(一)</sup>が、金子武雄氏<sup>(二)</sup>や市古貞次氏<sup>(三)</sup>は、同一作者の立場を取り、但し、巻六の着想・執筆は、巻八までのいわゆる本系の物語を書き上げた後であろうと推測された。一方今井源衛氏は、現行巻序通りの執筆を主張されている<sup>(四)</sup>。

これらの成立論の内、さほど客観的な根拠を持たない別筆説には、容易に従いたいであろう。むしろ、しばしば異質さを指摘される巻六の素材の中にも、女ばかりの空間(前齋宮家―巻五の女帝の宮廷)、好きな女性(前齋宮―巻三の女四宮)、個性的な女房達の活躍など、他巻と傾向を同じくするものを見出すことができる<sup>(五)</sup>。また、用語に関して、

御心すみやきて<sup>(六)</sup> (二七一―巻八・二三九)

かげかたもなく (一七五―巻二・三九、巻八・二四一)

にくきものと<sup>(七)</sup> (一七七―巻七・二二三)

ぬけあしふみて<sup>(八)</sup> (一八二―巻三・八三)

など、他の仮名散文作品には用例の少ない、特徴的な表現ながら、他巻と共有するものが幾つか指摘でき、却って同一作者を示唆するようである。

同筆を前提として、執筆順序の問題に移ると、金子・市古両氏の後補説は、巻六の物語世界の異質さを主な根拠としており、やや印象論に傾く趣が否めなかった。それに対し今井氏は、巻六の記述を前後の巻々と詳細に突き合わせた結果、「巻六は全体としては、構想上かなりうまく他巻に適合している」<sup>(九)</sup>ことを論証されたのである。しかし、いずれにせよ決定的な外証の得られないまま、現行巻序をむやみに疑うことは避けられているのが、現状であろう。

成立論の一方で、巻六の性格そのものを取り上げた論考も少なくない。その際、巻六を半ば独立した挿話として扱う立場と、物語全体の中における位置付けを探る立場とが存在する。そして後者の場合、大抵論じられるのは、直前の巻五との関係であった<sup>(一〇)</sup>。巻六が時間的に巻五に並行し、巻六の中心人物前齋宮が、巻五の主人公たる女帝と対照されている以上、そうした観点は至極当然であるし、正鵠を得ているだろう。しかし、現行の巻序、あるいは巻五の「ならび」<sup>(一一)</sup>という把握から、巻五との関係のみに囚われては、見落とすものも多いのではないか。後述するように、巻六は、遙か下つて巻八とも呼応しているのである。

本稿の目的は、巻八との関係を検討することによって、巻六が物語全体の中に占めている位置を見直すことにある。それは成立過程論と無関係の問題ではないが、当面、物語の構造の問題として、考

えることにする。

## 一 小宰相兄妹の後日談

巻六で活躍する前齋宮とその女房達は、巻五以前には片鱗も姿を見せていなかったし、続く巻七・巻八でも、後に触れる一箇所を除いて、登場することはない。巻六の物語は、本系の物語に全く影響を与えないといつてよい。この様態は、ちようと『源氏物語』の、いわゆる紫上系・玉鬘系諸巻の關係に似ている。また、巻六巻末には長大な後日談が付されており、前齋宮を巡る物語として、一卷で完結しているように見える。その上に、内容・用語上の特異性も重なつて、独立した別伝の巻と見なされやすく、成立の問題も生じてきたのであった。もつとも、独立とはいつても、時間的にほぼ並行する巻五の内容を踏まえていることは明らかなので、巻五の並びと位置付けられることになる。

しかし、巻六の完結性には、巻五をもつてしても補えない綻びが、僅かながら存在する。巻五の時間からはみ出した、巻末の後日談の部分である。初めに、前齋宮家の女房、中将の君の動向が語られ、「小宰相のいでらへうれしにぞ、「たに、は春も」など、またうちあげられしかど」(一九一)の辺りから、小宰相の君に転じる。小宰相は、かつて中将に代わつて、前齋宮の寵を受けるようになった女房である。これ以前に、次第に新大夫の君が勢力を伸ばしつつあるものの、小宰相も完全に失寵したわけではない由が語られていた。しかし、その小宰相が、何故に、またどこへ出て行つたのか、これだけでは解らない。

続いて、

A・世にはとくちりたる事もなくて、いうにありつきて、時々などは車たてながらまいりて、みまいらす。花びら、ほうもちは、さぶらふ人のなみに、うるさからぬおりはまいらせ、又おはりのちよくしのいとなど、おほからかにみならひ給へればなど、つかみつかはせば、ひとへがさねもをらせ、又うちわたりとて、はづさずこひせめさせたまへば、五せちのくしもとめてまいらせ、宮す所のうつくしき御ぞまいらせなどすれば、きたなき人ならばこそは、「あなうつくし。わらはきむ」などよるこばせ給ふ。いとあらまほしき御なかなり。 (一九一)(二)

とあることから、小宰相が「うちわたり」の「宮す所」に勤め始めたいらしいと察せられる。しかし、その「宮す所」の素性は依然不明である。にも関わらず、いかにも既知の事柄であるかのように語られている。

暫くおいて、再び小宰相のその後について触れるところがある。

B・小宰相は、さしづなどおもしろからねど、しのびやかなるかくれがに、又いとよきさともうけていでる。おとこの家あるじもほしうせねば、いでもかはらず、弁の心もありがたく、いぬのうちをとなくありつきてぞ、おひはつるまで過にける。 (一九二)

ここでもまた、「弁」なる人物が謎である。「弁内侍」(一八三)・「頭弁」(一八八)など、「弁」と呼び得る者は既に幾人か登場しているが、いずれも小宰相との接点は皆無であった。

もつとも、この人物については、続く「とをなか」(前齋宮家の格子番)の後日談の中で明らかになる。

C. まことや、御かうしまいりしとをなかは、……あるべかしき心さへつきて、いもうとたづねまいりたりし時、たれともしらぬにいであひて、ゑみむかひたりしをよすがにて、蔵人弁に申文もていきて、なくくいひければ、心ばへよき人にて、そうしとをして、しなの、権のかみにさへなりける。おもふことなさかぎりもなく、小宰相との、まいられたる車よせによりて、弁のとの、御心なさけ、なくくよるこびけるだに、まことにめでたきに、…… (一九二—三)

巻六が始まって間もなくの頃、小宰相の同母兄という「兵衛佐」なる人物が、長年噂に聞くばかりであつた妹に会うため、前齋宮邸を訪れていた。そこでは「とをなか」の応対は語られていなかったものの、Cを読めば、その兵衛佐が今では「蔵人弁」となり、Bのように「弁」と呼ばれているのであると推察され、一応疑問は解ける。しかし、任官記事もなしに、突然呼称が「弁」と変わるのには、やはり不自然に感じられる。

もつとも、未述の事柄を既成事実として記すことは、物語にそのまま見られる叙法である。『我身』においても、いつの間にか人物の身分・官位の変化している例が、他にないわけではない。例えば、巻八で今上帝に入内した忍草姫君は、立后記事のないまま、数年後には「中宮」と呼ばれており、それに伴って、巻七まで「中宮」であつた後涼殿は、久々に登場した時には「皇后宮」となっている。しかしいずれの場合も、前後の文脈を辿れば、混乱・誤認する恐れのないように記されている。また、一人の人を父に持つ忍草姫君が、有力な競争手のいない後宮に入内した以上、続く立后は、当時の物語享受層にとっては常識の範囲に属していただろう。それに連動して、

後涼殿中宮の位が移行することも、当然である。その他、巻四・巻五の「関白殿」が、巻七の幼帝の御代では「摂政殿」となる、といった事例もあるが、仮に任官記事の書き落としたとしても、さほどの違和感なしに了承することができよう。

しかし、兵衛佐から蔵人弁への転任は、出世コースの一つではあるが、必ずしも自明でお定まりの昇進というわけではない。Cで判明するにしても若干隔たっているし、そこでも既成事実として扱われているので、やはりBの記述に何かの不自然さは拭えない。

また、これ以前、兵衛佐は、前齋宮家の不作法さに閉口して、「たゞふみなどばかりぞへう」をこする(一一七一)という状態になつたまま、長く姿を消していた。Bの「弁の心もありがたく」が、彼が妹を生涯親身に後見したことをいうものとすれば、やや飛躍があるようにも感じられる。おそらく小宰相が前齋宮家を退いたことと関係するのだろうが、その辺りの事情はやはり曖昧である。

巻六はそのまま幕を閉じ、巻七以降、それとは全く無関係な本系の物語に立ち戻るのだが、巻八末、物語の大尾に至って、再び小宰相兄妹が登場する。

D. この宮す所の御かたには、右の大殿の御めのとのめいなりける、前齋宮にさぶらひけるぞ、……いひよりてまいりにければ、いとめやすく思ふやうなる人にて、この御方の事、おとなくしくいひをきて、まいる人にあひなどしける。はらひとつなる兵衛のすけといひしも、ふたへをりものはおそろしうて、がくもんをのみ、よるひるしければ、いみじうまめなるおほやけ人にて、この御時は、とりわきかずまへおぼしめしたる蔵人弁とて、ちの中納言よりも世おほえこと(へと)なれば、いもうと

のため、いとこまかに心ざしありてなん、あはれにおもひかはしたりける。  
(二四七)

「この宮す所」とは、東宮に入内した右大臣の娘(初草姫君)を指す。前斎宮に仕えていたという「右の大殿の御めのとのめい」は、「兵衛のすけ」の同母妹だから、小宰相に違いない。小宰相が東宮御息所に仕出し、兵衛佐は刻苦勉勵の末、今上帝に信任されて蔵人弁となつたというわけである。卑官の頃は、「たゞいま思ひをきてんに、なにばかりの心ざしをかすべならねば」(二六七)と、満足に妹の世話もできなかった兵衛佐だが、今や地位声望を得、小宰相もまたもな主人に仕え始めたため、心おきなく後見しているのである。引用部分に続いて、前斎宮が小宰相の退出を悲しみながらも許したこと、小宰相が旧主とも交流を保ちつつ御息所方で重んじられたことが述べられ、巻八は終結する。

これらの内容自体は、巻六の後日談AとCと全く齟齬を来さず、むしろ、先に見た不審点が、ここで晴らされることになるのだが、問題はその語り口にある。既に巻六で、小宰相が前斎宮邸を退いた「宮す所」に仕えていると記し、その兄を「蔵人弁」と呼んでいたにも関わらず、それには全く素知らぬ顔で、小宰相が御息所のもとに参じた経緯や、兵衛佐の昇進の事情を、いかにも初出の情報であるかのごとく述べているのである。

Dの叙述は、AとCでうっかり書き漏らしたことを、説明不足だったことを補った、という体ものではない。また、巻六の後日談は、「人は心もてよくもあしくもなるものかな、又所がらに、こゝろはつかふべき物とも御らんぜよ」(一九二)という、勸善懲惡的な教訓を建前としていた。だからこそ、善人側の小宰相兄妹には、よき果

報、つまり宮廷女房という境遇、あるいは蔵人弁という頭職が用意されたのである。その趣旨に従うならば、二人の榮譽を直接的に語るD以下の内容を、巻六で不注意に書き漏らしたとは、考えがたい。とすれば、巻六と巻八の巻末部にそれぞれ位置する後日談の前後関係を、改めて見直す必要がある。

## 二 巻六巻末部と巻八巻末部との関係

Dについて、巻序執筆説の立場からは、AとCの時点で、「既に巻八末までの構想が出来上つていたこととなる」<sup>(三)</sup>という解釈がなされている。なるほどこの物語は、年立・系図や官位変動における矛盾が比較的少ないなど、構想設計の周到さに定評がある。よって、巻六末執筆時点で既に、巻八末における小宰相兄妹の処置を予定していた可能性は考えられる。それにしても、小宰相の出仕先にせよ兵衛佐の昇進にせよ、巻六で一言触れておいても差し支えなかったのではという不審は残る。とすると、巻六の唐突な記述は、作者の錯誤による先走り、あるいは意識的な先取りということになるだろうか。

前者の場合、やや似た事例として、『源氏』の並びの巻の一つ、蓬生巻が挙げられる。しばしば後記補入説の論拠とされるところだが、まだ兵部卿であるはずの紫上の父宮が、多くの伝本で「式部卿の宮」と呼ばれているのである。もつともこちらは年立上の問題であり、ごくさりげない言及なので、「作者の不注意な誤り」<sup>(四)</sup>に帰すことも可能である。しかし、AとCの場合、その内容自体が、小宰相や兵衛佐の境遇の変化を必須の前提としており、つい筆が滑つたとい

う程度のものではなからう。構想力の確かさが評価されるならばなおさら、先々の物語の展開を十分見越していながら、かかる前後関係の混乱を、不注意に犯す恐れは少ないように思われる。

では、作者が何らかの効果を狙って、意図的にこのような記述をなしたのであるうか。例えば、やはり『源氏』の並びの巻、紅梅巻・竹河巻は、前後の巻々では宰相中将である薫の中納言時代の出来事を語り、後の橋姫巻で紹介される「八の宮の姫君」「宇治の姫君」の存在を仄めかしている。後記説や別作者説が生じる所以の一つだが、一方、現行巻序のまま、宇治十帖の伏線・予告としての機能を認める見解もある。両巻の成立の実態はともあれ、中世の物語としては珍しく、並びの巻を設定するほどの『我身』であるから、このような『源氏』の例に倣ったと考えられなくもない。

しかし、AとCとDを読み較べた時、次に展開する物語への期待を誘うという、伏線の効果を認めることは困難であろう。人物も所詮脇役に過ぎない上に、話題はごく単純な境遇の変化であつて、ストーリーとしてそれ以上発展するものではない。しかも、AとCの書きぶりは、仄めかしの度合いを越えていよう。結果として、何らかの表現効果を上げるところか、巻六の内部に不安定要素を残しただけに終わった感がある。

巻六後記補入説に従えば、本系の物語攢筆後に巻六が執筆された際、「巻六に照応すべき簡単な記事が巻八の末尾に書き添えられた」<sup>(二五)</sup> ということになるが、巻六執筆の途中、AとCに先立って、D以下を書き加えたのだとすれば、叙述の前後関係は不自然でない。ちなみに、巻序執筆説の場合でも、巻六の成立を二段階に分け、巻五―巻六本部分―巻七―巻八―巻六後日談という執筆順序を想定

すれば、同様の考え方を適用することができる<sup>(二六)</sup>。しかし、確かにDとAとCという執筆順序により、叙述の展開としては矛盾なく理解されるにしても、何故このように前後関係の逆転した記述をなしたのか、その点についての説明にはならないだろう。

巻八末に「書き添えられた」前齋宮家関係の後日談の意義を考えるに、巻六の世界を本系の物語の中に組み込むという働きが、第一に挙げられよう。ただでさえ異質さの際立つ巻六だが、後補であるならばなおさら、その位置は不安定にならざるを得ない。本系の物語の流れからすれば、最悪の場合、全く無視されてしまう恐れもある。巻六抜きには理解不可能なD以下の後日談は、巻六を本系の物語に引き寄せ、その脱落を防ぐであろう。

しかし、それだけの意図であれば、かように読者を混乱に陥れかねない記述をなす必然性はない。要するに、巻六末と巻八末との入り組んだ関係は、執筆順序の如何によつて解決される問題ではないのである。よつて、以下、成立過程論から離れて、考察を進めたい。

AとCとDとの照応は、単に巻八末が巻六を踏まえているばかりではなく、巻六の側でも、巻八末を必要とすることを指示している。巻六が年立上並行する巻五と密接な関係にあることは、改めていうまでもないのだが、その巻六には、AとC以外にも、

さかの女院の御事いできにかば、なべての世、まして思ひし  
めりたるにも、…… (一一七)

齋宮は、御国ゆづりにうちつゞき、あさましかりし夢のよを、  
…… (一一九)

のように、やや説明不足で、そのみでは意味を明確にしがたい記述が見受けられる。前者は女帝の母嵯峨女院の逝去による諒闇、後

者は女帝の讓位直後の崩御という、それぞれ巻五で起こった出来事を指している。これらの行文は、当然巻五の存在を前提とした読みを期待しているはずである。

「小宰相のいでられし」は、この二例と同じく、助動詞「き」でもって、既成事実として表現されていた。そしてその詳しい事情は、これ以前の物語には言及がなく、かといって全く不明なのでもなく、巻八末でほぼ過不足なく語られるのである。とすれば、巻六末の小宰相兄妹の後日談もやはり、巻八末の後日談より後に、その内容を踏まえて読まれることを求めているのではなからうか。

それは一つには、年立を明らかにせんがためのものである。小宰相兄妹をはじめ前齋宮家周辺の人々の余生は、巻五末の女帝崩御以後、巻七の悲恋帝の御代を跨ぎ、今上帝の統治する巻八、その最後に語られた東宮御息所の内をも越えて継続する。つまり、巻六末は物語全編の中で最も遅い時間を語っているのだが、AとCとDとの逆転的な記述が、その時間関係を指定するという機能は、確かに認められよう。

しかし、『源氏』の並びの巻でも、年立の上で前後の巻々と入り組む事例は珍しくないが、先述した紅梅・竹河両巻を除けば、大抵の場合、現行巻序通りに読み進めても、特に違和感を感じさせなかった。それに比して、巻六末を読むために巻八末が要請されるという『我身』の様態は、年立の錯綜という観点からでは説明しきれない、特異な性質を持っている。片や並びの巻、片や最終巻の掉尾と、それぞれ物語の中で特徴的な位置を占めるだけに、両者の関係は、物語の構造の面から再考する余地があるように思われる。

### 三 典型的な大尾の欠如

既に今井氏は、巻六の成立を検討される中で、巻八の巻末部にも言及されていた。つまり、その後日談が追加補筆であるという金子説に従えば、原初形態での巻八は、出家した皇后宮（三条院女御後涼殿）の余生を、

E. をのといふわたりに、心ふかくおぼしめしうけて、うつろはせ給にしかば、まして分まいる人もまれに、こゝろほそき御すまひなり。  
(二四七)

と語って閉じられていたことになるが、

これでは、八巻に亘る大長篇の大尾としては、甚だもの足りない形のように感じられる。少くとも文末は「……けり」で終りそうなものであるが、さりとて、また単にただ「けり」の結びに変えるだけでは、大尾としては不十分のように見える。<sup>二七</sup> という指摘である。

こうした印象は、確かに否定できないように思われる。周知のように、物語の典型的な大尾は、『竹取物語』<sup>二八</sup>の「……とぞ、言ひつたへたる」(七六)をはじめとして、「……とぞ」「……とかや」等、伝聞の形を取る。また、

次の巻に、女大饗の有様、大法会のこととはあめりき。「季英の弁の、娘に琴教へ給ふことなどの、これ一つにては多かめれば、中より分けたるなめり」と、本にこそ待るめれ。

(『宇津保物語』楼の上下・九四三)

に見られるように、架空の続巻や原本の存在を仄めかすものも多い。こうした定型句を用いずとも、

世とともにもののみおぼして過ぎたまひぬるこそ、いかなりける前の世の契りにか」とこそ見えたまへれ。

(流布本系『狭衣物語』巻四・下―三七三)

のように、作中人物への評言を述べるなど、何らかの形で語り手・書き手が顔を出す、草子地風の文が通例である。

その他、『有明の別』は、「…すぎさせ給にし御ためとも」(四四六)と、会話が途中で断ち切られる形で終わっており、後続部分の脱落でなければ、『源氏』の幾つかの巻末に見られた中断形<sup>(1)</sup>や、故意に損傷を仮構したらしい『松浦宮物語』にも通う技巧であったかもしれない。いずれにせよ、中古から中世の物語を通じて、ほぼ例外なく、締め括りの意識が表現の上に現れているのを認めることができる。

また、内容的に見ても、物語の掉尾を飾るに相応しい話題・対象を選ぶのが通常である。主人公達の幸福・栄華を語り、大団円の内にと収めるのが最も典型的だが、特に継子譚などでは、そこに勧善懲悪に基づいた教訓色が加味される。一方、『源氏』夢浮橋巻が、女君を失った男主人公の懊悩する姿で結ばれて以来、同様の趣向が、『浜松中納言物語』『狭衣物語』等に引き継がれる。そして中世には、その延長上に生じたと思しい悲恋遁世譚が盛行し、宗教性を帯びた結末が増えていくことになる。

試みに、『我身』同様、『無名草子』以降『風葉和歌集』以前の成立と推定される諸物語の終結部を見てみよう。末巻のみ残る『むぐらの宿』は、主人公の悶死の後、女君の栄華を「めでたし」を連発して称え、

のこりの五巻などにかき□□□たるとかや。よろづは、かやう

にありけるこそめでたく、御さいわいありがたく侍れ、とぞ。

(二八二)

と駄目押しして終わる。同じく末尾部分のみの残欠本『宰に濁る』は、女君の死去、帝の即身成仏の後、関白の善政を賞讃して幕を閉じる。

おとゞは一ほんのみやと申あはせて、めでたきまつりことなりと、たみまでいはれ、めでたかりけるとかや。

(二二一)

この後、一行分ほど空けて、二字下げで、

これを御らんぜむ人は、念仏申させ給べし。かならずく。

という宗教的教訓が続く<sup>(2)</sup>。もつとも、この部分は後人の所為という可能性もある。

その他、列挙すると、

かの山ふかくいりにし人も、ねんくつもりて、願ひのごとく、九品の上のしなにさだまる。おなじはちすの望も、むなしからざるべけんぞ、ほんには侍るめるとかや。

(『石清水物語』一五三)

御むまどもにめして、よしの、山をさして入給ぬるぞ、あはれるなる事にこそ、そのころはきき、侍りけめ。

(『いほでしのお』二七五)

殿、中宮などは、せきかねたまへる御けしき、ことほりなりとぞ。

(『吾の衣』一七七)

『石清水物語』は、伊予守遁世の後、木幡の姫君立后、一族の繁栄、そして伊予守の極楽往生という後日談で結ばれる。『いほでしのお』の末尾は、後半の主人公と目される右大将と権中納言の出家行。『吾の衣』は、中宮を物怪から救って立ち去った山伏が、行方知れずの

父親であったと判明した場面を最後に置く。いずれも主人公級の人物が登場し、宗教性の濃い感動的な場面が語られ、文末は伝聞形式を取る。また、中世、様々な異本を展開させた『住吉物語』でも、最後に主人公一族の栄華と継母方の末路を語り分け、処世的な宗教的教訓を付すという基本形は、諸本共通している。

このように、深い感銘と余韻を与える終わり方が通例化していた、当時の物語の中にあつて、『我身』のEは、淡白に過ぎるようである。大局的に見れば、巻八は大団円の帰結を見るといつてよいが、畳みかけるように栄華を強調するのでもなく、むしろ侘びしげな最後の一文は、宗教的感動にも乏しい。皇后宮は主要人物の一人ではあるが、大尾を担うほどの主人公性を有していたわけでもなからう。表現面でも終結部らしからぬ形であるのは、今井氏の指摘されるとおりである。

よつて、Eが「甚だもの足りない」大尾であることは首肯されるのだが、その不審は、D以下の後日談が後続することで、解消されているであろうか。現在見る形で巻八の結びは、新たに御息所に仕え始めた小宰相の勤務ぶりを語る一文である。

F・たゞさぶらふ所の御木丁、かべしろ、わらは、はしたものの、御てうとなにやかやと、いとまごゝろにいひをきてければ、おばもいみじうほめてぞ、さぶらひつきにける。(二四八)

勿論小宰相は、これ以前には巻六にしか登場していなかった、脇役的存在である。その一介の女房が、宮廷に出仕し重用されたというわけだが、例えば『落窪物語』のあこきや、『住吉物語』の侍従の目覚ましい出世に比して、やや中途半端な果報に留まる。文末はかろうじて「けり」を用いるものの、「とぞ」の類に較べれば、物語を締

め括る力は弱いだろう。内容・表現ともに、典型的な結びの形との間には、大きな懸隔があるといわざるを得ない。

要するに、EにせよFにせよ、「大尾」としては不十分」という点では、大差ないように思われるのである。かといつて、この物語に未完の疑いを差し挟む余地もまた、皆無である。一挙に約十年にわたる年月を進行させ、記録風に次々と出来事を述べていく巻八が、物語の終結を目指した巻であることは、明らかであろう。今上帝の治世下、聖代が到来し、母后大宮は宮中にあつてそれを後見している。左大臣と麗景殿との密通により生まれた忍草姫君は、実父に引き取られ、入内・立后する。右大臣も漸く北の方を定めた後、三条院の姫宮として育てられていた不義の娘(初草姫君)を皇后宮のもとより盗み出し、東宮(三条院第三皇子)の配偶とする。娘を失った皇后宮は出家隠棲、嵯峨院・我身女院・三条院は、既に崩御している。ここにあらゆる懸案が解決し、全ての主要登場人物の境涯が定まったことになる。もはや物語に語るべきことは残されておらず、これ以上の展開は望めないであろう。

さて、幼い東宮は、御息所となつた初草姫君が、かつて兄妹として睦んでいた皇后宮の姫宮にそっくりであることに驚きながら、同一人物であることまでは思い至らない。それが、情景として描写される、物語最後の場面である。

G・いはけなき御心ちに、そのことゝなく御心にしてみて、あはれとのみ見たまひし人の御さまに、人はおほえたるも、ことよろしきことこそあれ、ひがめかとのみあやしきに、いかなる御心ざしかそはん。……ほのかなるすみつきさへ、むかしの御さまにたがふ所なきぞ、なをあやしかりける。(二四六〜七)



この場面は、既に物語巻一〜三で幾度か繰り返された、次のような情景を、髣髴とさせるものがある。音羽の山里で我身姫君を垣間見した三位中将は、恋い慕う女三宮に瓜二つであることに驚く。姫君は実は三位中将の父関白と故皇后宮（水尾院皇后）との密通により生まれた娘であり、女三宮とは異父姉妹の關係にあつた。やがて三位中将（のち中納言）は、父のもとに引き取られた姫君と再会するが、音羽で見かけた女君との酷似に再び驚きながら、やはり同一人物であることに気付かないのである。そして、

たゞあやしうかよひ給へる御ぐしのかゝり、御袖のかさなりなど、猶おもひいでられぬにはあらねど、……（巻二・四〇）  
中納言もさまゝ、さらぬおもかげのみおもひいでらるゝ御さまに、見てもなくさむにや、つねにまいり給つゝ、とてもかうてもたゞおはしますさま、ことにはめつらしうめでたきに、めのみおどろかれ給。

めもおどろかるゝ御ふでのながれ、すみつきまで、たゞかの心をつくす御あたりに、いみじうかよへるをみるに、いとどうちもをかれぬを、……（巻三・六四）  
ちかき御にほひの、よのつねならず人に、ぬは、たゞそれかとのみまがひ給は、げにおほくのなくさめなるに、……

（同・七四）  
と、音羽の姫君の、ひいては女三宮の面影を、妹の上に見ることによつて、心を慰めるのだった。

両者を比較すると、三位中将が思いをかけた女性には実は妹であり、東宮が妹と信じていた姫君は実は他人でやがて妃となる、という具合に、ちょうど対照的な形になっていることが、見て取れるのである。

容貌・筆跡の酷似をもつても、同一人物ないし姉妹であることに全く思い至らない男君、片や二人の姫君は、いずれも臣下と后との密通により誕生し、後に実父に引き取られた、いわゆる「我身にたどる姫君」である。Gの場面に、物語前半部との対応が配慮されていることは、明瞭である。

Gに引き続いて、皇后宮の小野隠棲が語られるわけだが、これまた物語劈頭の、音羽の里に住む我身姫君に照応していると思われる。まず、「音羽」の地名は、逢坂山方面・比叡山方面の二箇所が存在するが、我身姫君が住んでいたのは、三位中将が比叡山よりの帰途立ち寄っていることから、後者の、音羽川流域の地であることが判る。そしてそこは、

そのわたりは、比叡の坂本、小野のわたり、音羽川近くて、滝の音・水の声あはれに聞こゆる所なり。

（『宇津保物語』忠こそ・一三三）  
とあるように、小野に程近い地であつた。

密通によつて生を受けた我身姫君は、名も知らぬ実の両親を恋ひ慕いつつ、その音羽の里において、「ふみわけたるあとなき庭」（九）「人めまれなるいはほのなか」（一九）という侘び住まいで、世を捨てた尼君に育てられた。一方皇后宮は、不義によつて儲けた娘の行方が知れぬことを嘆き、自ら出家して、「分まいる人もまれに、こゝろほそき御すまひ」に引き籠るのである。また、叔母・姪の關係にある我身姫君と皇后宮は、共に故皇后宮の輝くばかりの美貌を受け継いで、酷似した容貌を持つ（巻四・一〇二、巻七・二〇七）。しかも、実は皇后宮もまた、三位中将と女三宮との密通によつて生まれ、「我身にたどる姫君」の一人のはずであつた。この事実、巻四

以降ほとんど黙殺されているのだが、因果は巡って、初草姫君という、新たな「我身にたどる姫君」の母という役割が、皇后宮に課されることになったのである。

以上のように、巻八のGからEに至る部分は、物語の前半部と照応するところが大きい。しばしば指摘されるように、この物語は、人物の系統性・対称性の設定に随分意を用いている<sup>(三三)</sup>のだが、そうしたいわば図式的な性向を、ここにも看取できるであろう。そしてその照応の基軸となるのが、「我身にたどる姫君」という、まさに物語の題号たる主題なのである。忍草姫君・初草姫君が、第二・第三の「我身にたどる姫君」の運命を担って登場してくるのも、巻八であった。かかる主要テーマの掘り起こしによる、物語冒頭との緊密な対応をもってすれば、Eは十分物語の終結部たる資格を備えているといえよう。

その場合、後続する小宰相らの後日談は、ほとんど蛇足に等しいものとなる。もともと、Gの場面を受けて「この宮す所の」と始めるDは、いかにも付けたりの感があった。しかも、本系の巻々の中では、前斎宮家周辺の人々が登場する唯一の部分ゆえ、浮き上がった印象を否定できないだろう。終結に当たり、巻六の人物の後日談を加えることで、巻六を含めた物語全体の統括を意図したと解するにしても、初めに見たように、小宰相や前斎宮の物語はここで完結するわけではなく、さらにその先が巻六末に書かれているのである。その意味でも、Fの終わり方は甚だ中途半端だといわざるを得ない。よって、EとFとを比較した限りでは、本系の物語の全てに解決を与えた上で、物語冒頭部との照応を図っているEの方が、物語の結びとして、より相応しいように思われる。しかしそれにも関わら

ず、Eが大尾として「甚だもの足りない形」であるという印象もまた、やはり拭きたいものがある。先に確認したように、物語の終結部には、一読してそれと判るようなしるしを、何らかの形で留めておくのが通例なのである。冒頭部との照応という、かなり手の込んだ工夫を凝らしながら、何故明瞭に大尾らしい形を与えず、しかもその後、一見不必要な後日談を続けるのだろうか。

#### 四 大尾としての巻六巻末部

この物語が、物語の典型的な終わり方というものに、無知ないし無関心であったとは思われない。複数の巻から成る物語の場合、各巻の巻末部にも、全編の大尾ほどではないにせよ、ある程度の巻末意識が反映されることが多いが、『我身』もその例に漏れないのである。例えば、

うちきくより、れいのこゝろげさうかぎりなうて。

(巻二・五五)

大将はつきせぬ御こゝろのうちのみ。

(巻三・八九)

のように、文の途中で断絶して余韻を残す方法。また、巻一の、

いとしのびて、御ぶくのことなどのたまはせをきつるも、めつらかなり。

(三四)

は、やや平凡だが、故皇后宮の逝去に引き続いて、関白が我身姫君を引き取るという急転回に対し、当事者たる姫君の心中に即して、語り手が批評を加えたものと考えられる。同様に、

夜とゝものひとりずみのすさまじさぞ、なぐさむかたなきや。

(巻四・二二五)

も、代替わりに伴う変動の後、困難な恋に懊悩する男君達の姿を、語り手による詠嘆の口調で描出する。さらに、最も典型的な伝聞形式も、二度用いられている。

ゆめかうつゝかとも、なををろかなりとぞ。(巻五・一五九)

なにの御いのりもかひなしとぞ。(巻七・二二八)

この両巻は、帝の突然の崩御でもって幕を閉じるという点でも、共通している。

以上、いずれの巻の巻末も、一巻の結びに相応しい形を取っていることが理解されよう。それは語法面に留まるものではなく、委細は省略するが、何らかの劇的な事件や、代替わりのように区切りとなる出来事を選び、その巻における主人公級の人物の悲嘆・苦悩等の痛切な感情でもって、余情を漂わせて締め括っている。これらの諸巻からは、巻末を意識して工夫を凝らした形跡を、十分に窺うことができるのである。

そして、その巻末意識が最も明瞭な形で現れるのが、巻六の巻末である。先に言及したように、巻六末の後日談は、勧善懲悪に基づく教訓性を露わにしていたが、それは現世での因果応報ばかりでなく、「とをなか」の極楽往生、中將の「あつちじに」にまで筆が及んでいく。そして巻六の掉尾を飾るのは、亡き女帝の追善に余生を送り、兜率天に生まれ変わった近習女房達による、和歌会であった。

かぎりもなくこのましく、うらやましかりし人々こそ、いたるおやをなげかせて、やすきいもねず、つかへいとなみあはれたりし、あちきなくみえしかど、のちの世はみな、とそちのなにいみんへまいられけるとかや。はてはなを、うらやましき人に

そさだまりはてにける。かのきんず女房たちにへしおほせて、わかのかはいありけるにや。たがかりつたへけるにか、しらす。(二九四)

続いて四人の女房と女帝の詠歌十首を羅列し、

H たんばの天人は、いまもかみあげすがた、ましてきよげにて、如意殿（微）はきまはりて、とのもの官人、女官、女すまでもすてず、たづねもとめみちびき給ひけりとなむ。

かばかりくもりなき世に、齋宮、新大夫どの、りんず、のちの世のきこえぬこそおぼつかなけれ。(二九五)

と締め括る。傍線部のような伝聞形式、語り手の顕在化、宗教的感興等、後日談全体の教訓性と併せ、一巻の巻末を通り越して、一篇の物語の結末としても、申し分ない形を備えているといえよう。

しかも、現存する伝本の内、書陵部本<sup>三三三</sup>・前田家本は、「……となむ」と「かばかり……」の間に、「一行分ほど空白を置いている<sup>三三四</sup>。前節に挙げた『雫に濁る』のような例を参考にすれば、独立して記された最後の一文は、物語の聞き手ないし読者の感想を装ったものと、解釈すべきかもしれない。こうした技巧が物語原本に由来するものならば、その末尾意識はますます明瞭となろう。

従来、このような巻六巻末の性格は、「短篇物語としての結末を、型通り中世の往生譚形式で収めた」<sup>三三五</sup> という言に代表されるように、巻六を独立した別伝系の挿話と見なす一因となっていた。しかし、先に見たように、巻六を破綻なく読み通すためには、巻五は勿論、巻八が必要であり、巻六末の教訓性も、小宰相の出仕と兵衛佐の昇進を明記する巻八末を伴ってはじめて、十全なものとなるのである。

逆に、本系の物語の側から考えると、全巻の大尾でありながら、巻八は中途半端に終わり、その巻末の後日談は、巻六末の後日談へと滑らかに接続して、そこで漸く結びらしい結びに辿り着くのである。その時、巻六末尾のHは、巻六の終結に留まらず、実質的に物語全篇の大尾のような様相を呈して行くのではなからうか。

そもそも、巻八のEが、物語を閉じんとする気配を濃厚に漂わせながら、大尾らしい形に収めなかった、あるいは収めることができなかった理由を考えるに、物語の掉尾を飾るに相応しい人物の不在を、その一つに数えることができるように思う。大団円でめでたく結ぶにせよ、出家譚・往生譚のように宗教的感動の内に閉じるにせよ、その核となる主人公が必要となる。しかし、『我身』の場合、七代四十五年にわたる物語の進行につれて、焦点人物はどんどん拡散してゆき、当初主人公と目された我身姫君でさえ、いつの間にか遠景に霞んでしまったまま、ひっそりと生涯を終えていた。物語全体を一身に受け止めて統括できるような人物は、もはや存在しないのである。

その中で、敢えて最も有望な候補者を挙げるとすれば、既に亡き女帝しかないのではないか。巻五で聖代を現出し、往生譚とかぐや姫のイメージに濃厚に彩られつつ臨終を迎えた女帝は、巻七・巻八で繰り返して追慕される。さらに、今上帝の聖代実現は、亡き女帝の加護に依るところ大であったし、巻六でも、その超人的な明王ぶりが一層強調されている。少なくとも巻五以降、誰にも劣らぬ存在感を保持し続けてきた人物だったといつてよい。

巻六末尾の兜率天歌会の主催者は、まさにその女帝であった。ここでは、仏に見紛うばかりの女帝讃仰が頂点に達すると同時に、女

帝に忠誠を尽くした近習女房達、女帝と常に対照されてきた前斎宮など、本系の物語とは全く無関係ながら、巻六では中心的に活躍する人物達の後生が語られる。一方、本系の物語に登場する人々の処理は、巻八のEの段階で一応片付いている。巻八から巻六末の後日談へと読み続けば、本系の巻々と巻六とを問わず、物語の全て的主要登場人物に、決着が付けられることになるのである。その上で、双方の世界に跨って多大な役割を果たしてきた女帝を中心に、大仰な教訓話と往生譚を繰り返す巻六末は、物語全体を収束するに不足ない重みを備えているといえよう。

そして、そうした巻六末の位置付けを保証しているのが、巻八末の後日談なのではなからうか。巻六全体を物語の巻序の中に置く場合、その本体部分が巻五の「ならび」であることは動かないから、やはり現行の位置が最も相応しいであろう。そうすると必然的に、巻末の後日談も、巻七・巻八に先行することになる。しかし先述のように、A・C辺りの叙述には若干の違和感が残るので、その不審を引きずって巻八末に至った読者は、Dの記事によって納得し、巻六末が巻八末の後に位置すべきであることに気付くであろう。そして改めて巻六末に目を向けることになれば、その時Hは、物語全篇の結びとして立ち現れてくることになる。本系の物語の中でやや落ち着きの悪い巻八末の後日談は、物語の終結を巻六末へと誘導する役割を担って、そこに置かれたものではないだろうか。

もっとも、巻六末尾が物語の大尾であるならば、それ自身が巻八の最後に位置すべきではないかとの疑問も生じよう。しかし、巻六のような異質な世界、その中でも取り分け諧謔に満ちた後日談が、一応完結している本系の物語の秩序を、大きく掻き乱すことは必定

である。D以下の短い章段のみならば、直前のGの場面と自然に承接するし、卑俗さも比較的穏やかであり、本系の物語に持ち込むことのできる許容範囲だったのではなからうか。

また、巻六末の後日談は、前斎宮を巡る悲喜劇と一体であればこそ、教訓ないし諧謔の効果を上げるものであり、巻六の本体部分と切り離すことは難しい。要するに、巻六巻末は、前斎宮の物語としての首尾を整えると同時に、本系の巻々を含めた物語全体を統括するという、二つの課題を担っていたものと思しい。巻八末との前後関係の転倒は、そこに起因するのではないかと考える。

『我身』の本系の物語は、巻八において皇后宮の小野隠棲を語った時点で、内容的には確かに終結している。しかし、さらに巻六と関連する記事が付されることによつて、巻六末尾というもう一つの結尾が、引き寄せられることになるのではなからうか。そしてそれは、大尾として遙かに相応しい形を備え、物語全編を締め括るに足るものであった。

このように複雑な構造の類例を、現存する他の物語作品に見出すことは難しい。しかし、大尾の形に腐心し独特の手段を講じた<sup>三〇</sup>という点では、例えば『松浦宮物語』の省筆・偽跋が、收拾のつかなくなった物語を一拳に終息させる手法であったともいわれるような例に、一脈通じるものが感じられる。

そして、物語の典型的な終わり方を模索した、その工夫の跡に、物語の伝統というものへの拘りを窺うこともできるだろう。しかし、巻六末の教訓性や宗教性は、徹底的に滑稽の色調に染められているように、同時代の他作品のように、真摯な態度から発したものは

考えがたい。かかる戯文をこの長編物語の大尾と見なすことには、確かに抵抗も感じられるのであるが、こうした諧謔の精神は、濃淡の差はあれ、巻六ばかりでなく、物語全体に行き渡っているものであった<sup>三一</sup>。物語の典型に則りつつ、それを蹈晦するかのような諧謔ぶりにこそ、この作品の本領が発揮されているのかも知れない。勿論、その滑稽な結尾を、堂々と最終巻の巻末に据えているわけではなく、いわば小細工を弄している点にも、留意しておくべきであると考ええる。

いずれにせよ、本稿で検討したように、巻六が、巻五のみならず、巻八とも密接につながりを持ち、それによつて物語の大尾に位置付けられるとするならば、物語全体の中の巻六の意義を、改めて評価する必要があるだろう。例えば、女帝をめぐる物語も、巻六末の兜率天歌会をその終着点として、読み直すことができるのではないか。『我身にたどる姫君』という作品を論ずるにあたって、巻六という異質な巻をいかに取り扱うかは、ますます等閑にできない問題になってくるものと思われる。

#### 〈注〉

- (一)『日本文学大辞典』第三卷(新潮社、一九三四年、永積安明執筆)など。
- (二)『我身にたどる姫君論』、『物語文学の研究』笠間書院、一九七四年)。
- (三)『中世物語の展開』(『中世小説とその周辺』東京大学出版会、一九八一年)。
- (四)『我身にたどる姫君』論(『王朝末期物語論』桜楓社、一九八六年)。
- (五)今井氏も、前注論文において、性愛描写・ユーモア等、巻六を含めた物語全体の特色を指摘されている。

(六)引用は、鎌倉時代物語集成による。但し、一部表記を改め、他本を参照して底本の誤脱を補訂し、底本の形を( )内に注記した。

(七)「折悪しくも」に近い意で用いられている。

(八)「ぬきあし」の形が一般的。

(九)前掲注(四)、二〇五頁。

(一〇)辛島正雄『我身にたどる姫君』の文帝と前斎宮とをめぐる断章—レズビアン物語の示唆するもの—(『文学論輯』第三十八号、一九九三年三月)など。

(一一)現存する三種の伝本の内、金子本(国文学研究資料館寄託)のみ、巻六の首題に「ならび」の注記を持つ。

(一二)「名家譜第任之。多者先補五位藏人。乃任弁也。藏人帯之。頗清瑛也」(『職原鈔』上、中弁・少弁の項)とあるように、弁官と藏人の兼任は、限られた栄職である。

(一三)今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君』6(桜楓社、一九八三年)、二一三頁。

(一四)五上琢彌『源氏物語評釈』第三卷(角川書店、一九六五年)、四〇八頁。

(一五)前掲注(二)、六一〇頁。

(一六)詳細を確認していないが、前掲注(一一)には、巻六の後日談を「巻八欄筆以後の執筆とする説」も示されている。

(一七)前掲注(四)、二〇三頁。

(一八)以下の物語作品の引用は、それぞれ次のテキストによる。

『竹取物語』…新日本古典文学大系

『宇津保物語』…室城秀之『うつほ物語 全』(おうふう、一九九五年)

『狭衣物語』…新潮日本古典集成

『有明の別』『むくひの宿』『春に濁る』『石清水物語』『いはでしのぶ』『昔

の衣』…鎌倉時代物語集成

(一九)青表紙本系統の本文によれば、花宴・若菜下・柏木・匂宮・竹河などの諸巻に見られる。

(二〇)阿部秋生・前田裕子『春に濁る物語一冊』(『実践女子大学文芸資料研究所年報』第二号、一九八三年三月)、三頁。

(二一)完本が現存するのは巻一・二のみだが、全巻の巻頭・巻尾は、抜書本(三条西家本)に残っている(小木喬『いはでしのぶ物語本文と研究』笠間書院、一九七七年)。

(二二)宮田光『我身にたどる姫君』に於ける人物の対比と系統性について(『熊谷武至教授古稀記念国語国文学論集』笠間書院、一九七七年)にまとめられている。

(二三)橋本不美男・桑原博史『我身にたどる姫君』(汲古書院、一九七五年)の影印による。

(二四)金子本でも、行間は空けないが、最後の一文は改行して記されている。

(二五)前掲注(四)、二〇六頁。

(二六)このことは、成立論と無関係の問題ではあり得ないにせよ、必ずしも、巻六と巻八の成立の先後関係を決定するものではない。

(二七)注(五)参照。

(かなみつ けいこ・博士後期課程)